

夏目漱石

文士の生活

文士の生活

夏目漱石氏―収入―衣食住―娯楽―趣味―愛憎―
日常生活―執筆の前後

私が巨万の富を蓄たくわえたとか、立派りつぱな家を建てたとか、土地家屋を売買して金を儲もうけているとか、種々うわさな噂が世間にあるようだが、みな嘘うそだ。

巨万の富を蓄えたなら、第一こんな穢きたない家に入はいっていはしない。土地家屋などはどんな手続きで買うものか、それさえ知らない。この家だって自分の家ではない。借家である。月々家賃を払っているのである。世間の噂と
いうものは無責任なものだと思う。

まず私の収入から考えてもらいたい。私にどうして巨万の富のできようはありますか——というと、ではあなたの収入は？ と訊きかれるかもしれぬが、定収入といつては朝日新聞から貰もらっている月給である。月給がいくらか、それは私から言つて良いものやら悪いものやら、私にはわからぬ。聞きたければ社のほうで聞いてもらいたい。それからあとの収入は著書だ。著書は十五六種あるが、みな印税になっている。するとまた印税は何割だというだろうが、私のは外ほかの人のよりは少し高いのだそうだ。これを言つてしまつては本屋が困るかもしれぬ。い

ちばん売れたのは『吾輩は猫である』で、従来の菊判の本のほかにもこのごろ縮刷したのができている。この両方^{あわ}合せて三十五版、部数は初版が二千部で二版以下はたいてい千部である。もつともこの三十五版というのは上巻で、中巻や下巻はもつと版数が少い。幾割の印税を取つたところが、著書で金を儲けてゆくということは知れたものである。

いったい書物を書いて売るといふことは、私はできるならしたくないと思う。売るとなると、多少欲が出てきて、評判を良くしたいとか、人気を取りたいとかいふ考

えが知らずくに出てくる。品性が、それから書物の品位が、いくらか卑しくなり勝ちがちである。理想的に言えば、自費で出版して、同好者に只ただで頒わかつといちばん良いのだが、私は貧乏だからそれができぬ。

衣食住に対する執着は、私だってないことはない。いゝ着物を着て、美味うまい物を食べて、立派な家に住みたいと思わぬことはないが、たゞそれができぬから、こんなところで甘んじている。

美服は好きである。あえて流行を趁おう考かんがえもないし、もう年を取ったからしやれても仕方しかたがないと思っっている

ので、妻のお仕着せしきを黙って着ているが、女などがいゝ着物を着たのを見ると、なるほどいゝと思う。

食物は酒を飲む人のように淡泊な物は私には食えない。私は濃厚な物がいゝ。支那料理しな、西洋料理が結構である。日本料理などは食べたいとは思わぬ。もつともこの支那料理、西洋料理もある食通という人のように、何屋の何でなくてはならぬというほどに、味覚が発達してはいない。幼穉ようちな味覚で、油っこい物を好くというだけである。酒は飲まぬ。日本酒一杯くらいは美味しいと思うが、二三杯でもう飲めなくなる。

その代り菓子を食う。これとても有れば食うというくらいで、わざく買って食いたいというほどではない。煎茶せんちゃも美味しいと思って飲むが、自分で茶の湯を立てることは知らぬ。苳たばこは吸っている。一事止よしたこともあったが、苳を吸わぬことが別に自慢にもならぬと思ったから、また吸いだした。あまり吸って舌が荒れたり胃が悪くなったりすればちよつと止よすが、癒なおればまた吸う。常に家にいて吸っているのは朝日である。値段はいくらか知らぬが、安いのである。妻がこればかり買っておくから、これを飲んでゐる。外に出て買う時にかぎって

敷島しきしまを吸うのは、十銭銀貨一つ投ほうり出せば、釣銭つりせんが要いらずに便利だからである。朝日よりも美味うまいかどうか、私には解らぬ。

家あざぶに対する趣味は人並ひとなみに持っている。このあいだも麻布あざぶへ骨董屋こつとうやをひやかしに出掛けた帰りに、人の家をひやかしてきた。ちよつと目に付く家を軒毎のきごとに覗のぞき込んで一々点数を付けてみた。私は家を建てることが一生の目的でもなんでもないが、やがて金でもできるなら、家を作ってみたいと思っている。しかし近い将来にできそうもないから、どういふ家を作るか、別に設計をしてみた

ことはない。

この家は七間ばかりあるが、私は二間使っているし、
子供が六人もあるから狭い。家賃は三十五円である。家
主は外との釣合つりあいがあるから四十円だといってくれと言っ
ているが、別に嘘を言うこともないと思つて、人には正
直に三十五円だと言っている。家主が怒おこるかもしれぬ。
地坪は三百坪あるから、庭は狭いほうではない。しかし
植木はみな自分で入れたのだから、こんな庭の付いてい
る家としたら、三十五円や四十円では借りられないだろ
う。植木屋というものは勝手かつてなもので、一度手入れをさ

せたら、こっちで呼ばないのに、時々若い者を連れて仕事にやって来る。物の一月余りもこちこちそこらをいじっていることがある。別に断ことわるのも妙だと思つて、なんとも言わずにいるが、なか／＼金がかゝる。

私はもっと明るい家が好きだ。もっと奇麗な家にも住みたい。私の書齋の壁は落ちてるし、天井は雨洩あまもりのシミがあつて、ずいぶん穢いが、別に天井を見ていってくれる人もないから、このまゝにしておく。なにしろ畳の無い板敷である。板の間から風が吹き込んで冬などは堪たまらぬ。光線の工合も悪い。此上に坐すわつて読んだり書いた

りするのは辛いつらが、気にしだすと切りがないから、関わかまずにおく。このあいだある人が来て、天井を張る紙を上げましようと言ってくれたが、御免を蒙こうむった。別に私わたしがこんな家が好きで、こんな暗い、穢けだい家に住んでいるのではない。余儀なくされているまでである。

娯楽ごらくというような物には別に要求もない。玉突たまつきは知らぬし、囲碁いごも将碁しょうぎも何も知らぬ。芝居しばいはこのごろ何かゆきがかの行掛り上から少し見たことは見たが、自然と頭かぶの下さかるような心持で見られる芝居は一つもなかった。面白おもしろいはもちろん思わぬ。音楽も同様である。西洋音楽のいゝ

のを聞いたらどうか知らぬが、私は今までそういう西洋音楽を聞いたことの無いせいか、まだ一度も良い書画を見るくらいの心持さえ起したことはない。日本音楽などはなおさら詰つまらぬものだと思う。たゞ謡曲だけはやっている。足掛あしかけ六七年になるが、これも怠なまけているから、どれほどの上達もしていない。下しもがかりの宝生ほうしようで、先生は宝生ほうしよう新氏である。もつとも私は芸術のつもりでやっているのではなく、半分運動のつもりで唸うなるまでのことである。

書画だけには多少の自信はある。あえて造詣ぞうけいが深いと

いうのではないが、いゝ書画を見た時ばかりは、自然と頭が下るさがような心持がする。人に頼まれて書を書くこともあるが、自己流で、別に手習いをしたことはない。真ほんの恥を書くのである。骨董も好きであるがいわゆる骨董いじりではない。第一金が許さぬ。自分の懐ふところ都合のいゝ物を集めるので、知識は悉無しつむである。どこの産だとか、時価はどのくらいだとか、そんなことはいっさい知らぬ。しかし自分の気に入らぬ物なら、何万円の高価な物でも御免を蒙る。

明窓浄机めいそうじょうき。

これが私の趣味であろう。閑適を愛するの

である。

小さくなつて懐ふところ手して暮したい。明るいのが良い。暖かいのが良い。

性質は神経過敏のほうである。物事に対して激しく感動するので困る。そうかと思うと、また神経遅鈍なところもある。意志が強くて押える力のあるためといふのはなからう。まったく神経の感じの鈍いところがどこかにあるらしい。

物事に対する愛憎は多いほうである。手回りの道具でも気に入つたの、嫌きらいなものが多いし、人でも言葉ことばつき、

態度、仕事の遣り口などで好きな人と嫌いな人がある。どんなのが好きで、どんなのが嫌いかということはいずれまた記す機会があると思う。

朝は七時過ぎ起床。夜は十一時前後に寝るのが普通である。昼食後一時間くらい、転寝をすることがあるが、これをすると頭の工合のたいへんよいように思う。出不精しようのほうであまり出掛けぬが、時々散歩はする。俗用で外出を已やむなくされることも、たまにはないではない。人を訪問に出ることはあるが、年始とか盆とかの回礼などは絶対にしない。またする必要はないと考えている。

執筆する時間は別にきまりがない。朝の事もあるし、午後や晩の事もある。新聞の小説は毎日一回ずつ書く。書き溜^ためておくと、どうもよくできぬ。やはり一日一回で筆を止めて、あとは明日まで頭を休めておいたほうが、よくできそうに思う。一^{いっ}気呵^か成^{せい}という^かような書^か方^かはしな^かい。一回書くのにたいいてい三四時間もかゝる。しかし時によると、朝から夜までかゝって、それでも一回のでき上らぬこともある。時間がじゅうぶんにあると思うと、やはり長時間かゝる。午前中きり時間がないと思っ^ってかゝる時には、またその切り詰^つめた時間でできる。

障子に日影の射した処ところで書くのがいちばんいいが、この家ではそんなことができぬから、時に日のあたる縁側に机を持ち出して、頭から日光を浴びながら筆を取ることもある。あまり暑くなると、麦藁帽子むぎわらを被かぶって書くようなこともある。こうして書くと、よくできるようである。すべて明るいところがよい。

原稿紙は十九字詰十行の洋罫紙ようけいしで、輪廓は橋口五葉君はしぐちごように画かいてもらったのを春陽堂しゆんようどうに頼んで刷らせている。十九字詰にしたのは、この原稿紙を拵こしらえた時に、新聞が十九字詰であったからである。用筆は最初Gの金ペン

を用いた。五六年も用いたろう。その後万年筆にした。今用いている万年筆は二代目のでオノトである。別になれがいいと思つて使つていゝるのでもなんでもない。丸善まるぜんの内田魯庵君うちだろあんに貰つたから、使つていゝるまでである。筆で原稿を書いたことは、まだ一度もない。

（大正三・三・二二「大阪朝日新聞」）

日本文学電子図書館

文士の生活

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第11巻」 角川書店

昭和42年7月30日 7版発行

日本文学電子図書館